
魔戒騎士と魔剣士が幻想入り

超絶暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔戒騎士と魔剣士が幻想入り

【Nコード】

N9990X

【作者名】

超絶暇人

【あらすじ】

伝説の黄金騎士、牙狼の称号を持つ男 冴島 鋼牙はいつも通りに出かけていると、強力な魔力を感じる。そこに向かうと、女性が生きて、瞬間、鋼牙の姿は消えた。

伝説の魔剣士、スパーダの息子 ダンテはいつもの様に依頼を受け、その場所に行くと、女性が居て、瞬間、ダンテの姿は消えた。

鋼牙とダンテは幻想郷に落とされ、出会う。

鋼牙とダンテ、果たして彼等の運命は…

第1話 騎士と剣士と幻想郷（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは。

yousyunです。

今回はコラボ作、魔戒騎士と魔剣士が幻想入り です。

みなさんは知っている方も多いと思います。

牙狼とデビルメイクライ、僕的には良い組み合わせだと思っています。

ではどうぞ。

第1話 騎士と剣士と幻想郷

初めまして かな？

俺の名はザルバ、魔導輪だ。

これから話すのは、鋼牙と気の軽い魔剣士の幻想郷での物語だ。
その日俺達は、いつも通り出かける準備をしていた。

鋼牙「…ん？」

ザ「どうした？ 鋼牙。」

鋼牙「何でもない…行ってくる。」

ゴンザ「行ってらっしゃいませ、鋼牙様。」

大通り

ザ「…ん？鋼牙、強い魔力を感じる！」

鋼牙「何？」

ザ「北の方からだ！」

鋼牙「…」

ダッ

あの時、強い魔力を感じたのは確かだ…だがそれ以上に奇妙な物を俺達は見た。

ダッ

鋼牙「…ザルバ、どっちだ。」

ザ「目の前だ…」

鋼牙は見た。

そこには日傘をさした若い女がいた。

金髪の長い髪、西洋の珍しい服を着ている。

？「・・・」

女はこちらを見て笑みを浮かべる。
すると…

スウオーー

鋼牙「？ザルバ！これは何だ？」

ザ「俺もわからない！だがわかるのは…」

「何処かへ連れて行かれちまうって事だ？」

さて、お喋り指輪の話しも終わったし、そろそろ俺も始めるか…

俺はダンテ。

これからよろしく頼むぜ、相棒。

俺はある女から依頼を受けて、その場所へ向かうところだった。

ダンテ「確か依頼を受けた場所がここだったな。」

何もない静かな場所。

悪魔共が現れてもおかしくないな。

ダンテ「いるんだろ？出て来いよ。」

？「ウフフ…」

女の声が後ろからする。恐らく、こいつが親玉だろう。

ダンテ「隠れてたって何もねえぜ。俺と闘うんだろう？だったら出て来い。」

？「・・・」

女は姿を現した。

金髪の髪の上にはヒラヒラした帽子。

アジアの服を着ているみたいだな。

しかも、夜に日傘。

いよいよ怪しくなってきた。

スウオーー

ダンテ「何だ？俺を何処かへ連れて行く気か？ふっ…イイぜ、しばらく暇だったからな。何処へでもついて行ってやるよ。」

スウォー

鋼牙「うあっ？」

スウォー

ダンテ「よっと」

鋼牙視点

鋼牙「うっ…」

ここは何処だ？

あの女は一体？

ホラーか？ いや違う…あれはホラーでは無い…なら一体…

ダンテ「ちよつと良いかい？ あんた。」

銀髪の男は俺にそう聞く。

鋼牙「…誰だ？」

ダンテ「俺はダンテ、デビルハンターさ。」

鋼牙「俺は冴島 鋼牙、魔界騎士だ。」

ダンテ「…日本にも俺みたいな奴がいたんだな。」

鋼牙「そんな事はどうでもいい…ここは何処だ。」

ダンテ「それは俺も聞きたいくらいだ。」

鋼牙「ザルバ、ここが何処か調べてくれ。」

ザ「…すまない、全くもって特定できない。」

ダンテ「おっ！珍しいな。喋る指輪なんて、初めて見たぞ。」

ザ「そう言うが、お前は喋る武器を持っているようだな。」

ダンテ「何で俺が持っているってわかるんだ？」

ザ「魔力によって言葉を持っている奴等はだいたいわかる。しかし…本当によく喋るみたいだな。」

ダンテ「ああ、そりゃな。」

ダンテは腰の辺りから何か取り出す。

ダンテ「そら、喋っていいぞ。」

？「ふゝ…お主、名は何と申す。」

ザ「まずは自分から名乗るのが礼儀だろ。」

？「それは失礼した。我が名はアグニ！」

？「我が名はルドラ！」

ザ「俺はザルバだ、よろしくな。アグニとルドラ。」

アグニ「こちらこそ話し相手が出来て嬉しいぞ。」

ルドラ「そうだ、今まで話し相手と言えば兄者しかおらんからな。」

アグニ「お、弟よ…お前、兄と話しをするのは嫌いなのか？」

ルドラ「そうは言ってない兄者！ただ話す相手が少ないと言っているだけだ！」

アグニ「弟よ…兄は悲しいぞ…」

ルドラ「あ、兄者！」

ダンテ「時間切れ、お喋りはそこまでだ。」

ザ「なる程、お前が嫌がるのも無理ない。」

鋼牙「よく喋るのはお前も一緒だろ、ザルバ。」

ザ「俺はあそこまでうるさくないぞ。」

ダンテ「確かに、こいつらに比べればまだ良いさ。」

ザ「…ん？誰か来るぞ！」

ザルバは何かを感じたようだ。
一体何が来る？

？「わはく人間だ。」

鋼牙「？」

ダンテ「？」

まあ、今日はこれくらいだ。

続く…

次回！
宵闇

第1話 騎士と剣士と幻想郷（後書き）

ちなみに説明の主はザルバです。

次回は二人を紹介したいと思います。

いらなと言われてもやります！

感想待ってまゝす！

ではまた次回。

鋼牙とダンテの紹介（前書き）

作者「今回は鋼牙とダンテの紹介なのですが、イメージ通りにいか心配です…」

ザ「牙狼のドラマやスペシャルを見ていたお前なら大丈夫だろ。デビルメイクライだって、全作プレイしたんだろ？」

作者「それでも書けないのが僕なんですよ、ザルバさん…」

ザ「この通り心配だらけの作者だが、見てやってくれ。」

鋼牙とダンテの紹介

冴島 鋼牙

種族…魔戒騎士（人間）

身長…182cm

魔戒騎士・牙狼の鎧を召還して戦う青年。

数々の戦いを経て、魔戒騎士として無敵の存在になりつつある。

数々の戦いを経て成長しており、現場の残留思念からホラーの能力・特徴を探れる。

幻想郷では人外の能力や特徴を探れる。

武器

魔戒剣（ソウルメタル）

両刃の剣。

ソウルメタルで作られているため、所持者の心の有り様によって重さが変わる。

（一般なら超重量で持ち上げられないが、心が強いもしくは修行を積んだ戦士の場合は羽毛のように軽くなる。）

鋼牙が魔戒剣で天を裂くと鎧を召還、牙狼になる。

牙狼になると、魔戒剣が牙狼剣に変化して、威力も上がる。
リーチも少し長くなり、色も黄金、刀身には紋章が現れる。

ダンテ

種族…半人半魔（人間の母親×魔剣士の父親）
身長…183cm

伝説の魔剣士スパイダの息子。

自身も悪魔を狩る、

‘悪魔も泣き出す、最強の悪魔狩人（デビルハンター）

その強さは円熟の域に達し、ますます冴え渡る。

ダンテは魔の力を解放すると、魔人化する。

魔人化すると、姿が悪魔のようになり、力も跳ね上がる。その力は父親を超える。

沢山の武器を所持しているが、ほとんどは時空神像に保管している。

武器

リベリオン（意味は 反逆）

リーチの長い両刃大剣。

威力も高く、ダンテ愛用の武器。

この剣は父親の形見でもある。

刀身にドクロ彫りの紋章がある。

エボニー&アイボリー

連射長けている二丁拳銃。

意味はピアノの黒鍵と白鍵。連射長けているのはその意味もある。

ダンテが力を注ぐと弾丸が魔力を帯び、威力が上がる。

剣とのコンボが繋げやすく、使い勝手が良い。

イメージ通りにいきましたでしょうか？

できれば感想お願いします。

鋼牙とダンテの紹介（後書き）

ザ「どうだった？」

作者「まあまあですね。満足でも無く、不満でも無いです。」

ザ「次回は鋼牙とダンテが敵と戦うんだよね？」

作者「はい、1話を見ている人なら大抵わかる相手です。初戦なので短めだと思っています。
ではまた次回。」

第2話 宵闇（前書き）

宵闇 でわかる方はかなり多いと思います。
敵はそう…○○なのかーです。

ではどうぞ。

第2話 宵闇

よう、また会ったな。

今日は前回の続きだ…楽しんで行ってくれ。

? 「わはゝ人間だゝ。」

鋼牙「？」

ダンテ「？」

ザ「何だお前は？」

? 「私はルーミア、ねえ、あなた達は食べても良い人間？」

ダンテ「食べるだよ。どうやら俺達はお嬢ちゃんのディナーになるようだぜ。」

鋼牙「ザルバ、あの娘は？」

ザ「…ほお、今時珍しいな。」

鋼牙「何だ？」

ザ「こいつは妖怪だ、ホラーじゃない。」

鋼牙「妖怪、こいつの能力がわかるぞ。」

ザ「本当か？」

鋼牙「闇を操る程度の能力、どう言う闇を操るのかわからないが、とにかくわかる。」

ダンテ「闇か…どんな物か、見せてもらおうか。」

ル「お腹が減った、いただきます！」

ルーミアは鋼牙達に向かって飛ぶ。

ダンテ「鋼牙、行くぞ。」

鋼牙「ああ。」

シーン…

シャキーン

ダンテと鋼牙は剣を抜く。
そしてルーミアを横に跳んで避けると…

鋼牙「うおおおおお！」

ダンテ「lets rock！」

ダンテと鋼牙はルーミアに向かい、剣を振る。

ル「うわ？」

ルーミアは剣を避ける。

ダンテ「ショーはこれからだ！」

ダダダダン！

ダンテは愛用の銃、エボニー&アイボリーを構えて撃つ。

ル「わっ！」

ルーミアは弾丸を飛んで避ける。

ザ「飛べるだど？」

鋼牙「ふんっ！」

ブオン！

鋼牙はルーミア目掛けて魔戒剣を投げる。

フオフオフオフオン…

魔戒剣はルーミアに向かって回転しながら飛んで行く。

ル「剣が飛んでる！」

サッ

ルーミアは剣に驚きながらも軽く避ける。

ル「お兄さん強いね、私も本気をだすよ！」

「夜符 ナイトバード！」

ルーミアは見た事の無い札を取り出し、そう唱えると、後ろに闇が現れ、そこから黒い鳥が飛ぶ。

鋼牙「何だあれは？」

ダンテ「闇はあれの事か。」

ダダダダン！

ダンテは黒い鳥に向かって銃を連射。

ボボボン！

黒い鳥は銃弾によってボンと消える。

ダンテ「さて、次は何だ？」

ル「赤いお兄さん凄いね！やる気が出て来たよ！」

「月符　ムーンライトレイ！」

ルーミアは弾幕を放ちながらレーザーを放つ。

鋼牙「レーザーか…」

鋼牙は弾幕を避けながら剣の胴を向ける。
すると…

ピーーン

剣の胴がレーザーを跳ね返す。

ル「ウソ？」

ルーミアはレーザーが跳ね返るのが想定できなかったのか、レーザーはルーミアの腕をかする。

ビシュッ

ル「痛っ！」

鋼牙「はあああああ！」

スバツ

鋼牙は空高くジャンプをし、ルーミアに剣を振る。

ダンテ「そら！」

ダンテも鋼牙と同時に剣を構え、剣を振り上げると同時にルーミアに向かってジャンプをする。

ル「うわわわ…」

ルーミアは頭を腕で押さえ、膝を曲げる。

鋼牙「ダンテ！」

ダンテ「わかってるよ。」

ダンテは剣を背中に掛け、ルーミアの首の後ろを叩く。

ドンッ！

ル「うつ…」

ルーミアが落ちそうなところを鋼牙が抱える。

スタッ

ザ「で、どうするんだ？このお嬢ちゃんは…」

鋼牙「どこか、休ませられる場所があれば…」

ダンテ「おい、あそこに何か見えるぞ。」

ダンテが指した場所には紅い館が建っていた。

鋼牙「しばらくあそこで休もう。」

ダンテ「賛成だ。」

鋼牙はルーミアを抱えたまま、ダンテと紅い館に向かった。

さあ、変な紅い館が見えたぜ。
こっからが本番だ。

次回！

魔館

続く
⋮

第2話 宵闇（後書き）

次回はあの○魔館に行きます。

鋼牙とダンテは訳もわからず怪しまれてしまい、大変になります。
ちなみに牙狼はレッドレクイエム後、デビルメイクライは4の後、
2の前です。

ではまた次回。

第3話 魔館（前書き）

今回は○魔館へ鋼牙とダンテが行きます。
ついに本気をだすか：

ではどうぞ。

第3話 魔館

前回のお嬢ちゃんを休ませるためにあんな目にあうとはな…

鋼牙とダンテが紅い館を目指して歩いていると…

ダンテ「おっ、あれは…」

鋼牙「どうした？」

ダンテ「もしかして…鋼牙、ついて来い。」

ダンテは木を避けながら進む。すると…

ダンテ「やっぱりな…」

鋼牙「何だこれは？」

ダンテ「こいつは時空神像って言ってな、…説明できないけどとにかく凄い物なんだ。しかし、ここにもあるとは…」

鋼牙「何をしている？」

ダンテ「武器換えだ。」

ダンテは腰からアグニ&ルドラを取り出す。

ダンテ「そら！」

シューーン

ダンテはアグニ&ルドラを時空神像に投げる。すると時空神像に吸い込まれ、今度は時空神像から籠手が現れる。

ダンテ「これで良し。」

ダンテは籠手を手や足に装備すると、急に…

パァーーン

籠手は光を帯び、ダンテの力となる。

ダンテ「じゃあ、行こうぜ。」

鋼牙「ああ。」

鋼牙とダンテは再び歩く。
そして紅い館へ…

ザ「デカいな…」

ダンテ「さあて、お邪魔するのでしょうか。」

鋼牙「門番がいる筈だ。」

鋼牙がそう言った直後、鋼牙の視線には居眠りをしているチャイナドレスの女性が居た。

鋼牙「・・・」

鋼牙は信じられないと言う顔をしながら門番の近くに寄る。

？「ZZZ…ムニヤムニヤ…」

鋼牙「起きろ。」

ダンテ「俺に任せろ。」

ダンテはエボニーとアイボリーをクルクル回し、構える。ダンテ行
う事、それは…

ダダダダダダン？

ダンテはエボニーとアイボリーを門番に当たらないように乱射する。

？「うえ！うわわわわ？」

門番は銃弾に驚き、片足立ちで壁に張り付く。
銃弾は門番の形を作る。

ダンテ「お目覚めかい？」

？「・・・」

鋼牙「すまないが…「何ですかあなた達は！もしや…お嬢様を狙った暗殺者…そうとわかったらこの私が直々に成敗してくれる！」・・・」

ザ「おいおい、勘違いも甚だしいな…」

ダンテ「良いね、勘違いは置いてくとして、闘うんだろ？なら俺が相手だ。」

？「あなた、名はなんと…」

ダンテ「俺はダンテ、悪魔狩人さ。」

？「私は紅　美鈴（ほん　めいりん）、あなたは私の拳に勝てますか？」

ダンテ「拳か、ちょうど良い、久々にベオウルフでぶっ飛ばすか。」

ダンテはベオウルフと言う籠手を構える。
ベオウルフは光を発し始める。

ダンテ「come on！」

紅「では、行きますよ！」

ダン

美鈴はかなりの速さでダンテに近づく。

ダンテ「来な！」

紅「はあああああ！」

美鈴は拳をダンテの顔面目掛けて繰り出す。

ダンテ「ハア！」

ダンテは美鈴が拳を繰り出すと同時に自分もタイミングよく左ストレートを繰り出す。

ベギッ

拳が届いたのは…

紅「うふっ！…うぐ！」

ダンテの拳だった。

美鈴は吹っ飛んで何回かバウンドする。

紅「ぐは…カウンターとは…やりますね…」

ダンテ「まあな。」

紅「あなたとは本気で闘えそうです。」

「撃符「大鵬拳！」

美鈴は札を取り出し、そう唱えると、美鈴はダンテに近づき、拳を振り上げる。

ダンテ「！」

ガキーン！！！！

紅「な、何？」

ダンテ「STYLE：ロイヤルガード。」

ダンテは美鈴の拳を腕一本で防ぐ。

ダンテ「お前達のその札。一体どうなっているんだ。」

紅「スペルカードを知らないんですか？」

ダンテ「スペルカード？それってこれの事か？」

ダンテはジャケットのポケットから札を取り出す。

紅「！」

ダンテ「そうなんだな。これは…」

「わかった！」

「一撃「リアルインパクト！」

ダンテはスペルカードを見て唱える。
すると…

パァーーン

ベオウルフが発光し、ダンテは素速く美鈴に近づき…

ダンテ「ハアアアア？」

ズゴッ！！！！

紅「うっ…ぐ…」

ダンテ「フンッ！」

スガーーーーン!!!!

ダンテのベオウルフの一撃は美鈴の腹を打ち抜く。

ダンテは拳を振り上げながら高くジャンプ。

美鈴はダンテの一撃により、空高く舞い上がる。

紅「ぐぐ…ぐは？」

美鈴は舞い上がった後、急降下して落ちる。

ダンテ「STYLE…トリックスター。」
「エアトリック！」

シュウン

ダンテは瞬間移動で美鈴の真下に向かい、落ちて来た美鈴を抱える。

ダンテ「気絶してるな…レディには手加減した筈だが…」

ダンテのいつも以上の自分の力に驚く。

ダンテ「鋼牙！お前のポケットに何か入ってないか？」

鋼牙「ポケット？…これは…」

鋼牙は見た事の無い札をポケットから取り出す。

「ダンテ「そいつはスペルカードって言って、必殺技の形なんだとよ。」

鋼牙「これが…」

「ザ「スペルカードか…おもしろい、そいつを使えば必殺技が使える
と言う仕組みか…」

ダンテ「おい、早く行こうぜ。」

鋼牙「そうだな。」

鋼牙とダンテは門を開け、先に進む。

扉が目の前に見える。
鋼牙とダンテは扉を開ける。すると…

ガチャ！

ギギギ…

巨大な扉は音を起てて開く。

ザ「豪く広いもんだ…」

ザルバがそう言う…

シュン

ストーン

突然ナイフが足元に刺さる。

鋼牙「誰だ？」

？「誰だはこっちの台詞。」

声の方向にはメイド服の女性が居た。

？「美鈴を倒すと言う事は、実力が期待できるわね。」

鋼牙「待ってくれ！俺達はただこの娘を休ませたいだけなんだ！」

鋼牙は抱えているルーミアを女性に見せる。

？「なる程、失礼致しました。この娘はしばらく休ませるとしましょう。」

女性がそう言うと、何処からともなく妖精が現れ、ルーミアを連れて行った。

ザ「妖精…この世界には珍しい物がたくさんあるな。」

？ 「とりあえず、あなた達の御名前を聞いてもよろしいでしょうか」

鋼牙「冴島 鋼牙だ。」

ダンテ「俺はダンテ、よろしく。」

？ 「十六夜 咲夜（いざよい さくや） ですよ。突然ですが、あなた達の実力を試させてもらいます。」

鋼牙「…なら俺が相手なる。」

鋼牙は前に出る。

鋼牙（時を操る程度の能力か…おもしろい。）

咲「では…」

シュツ

咲夜はナイフを数本投げる。

鋼牙「ふんっ！」

カキン

鋼牙はナイフを剣ではじく。

咲「やりますね、では…」
「幻符「殺人ドール！」」

咲夜はジャンプをし、周りにナイフを放る。

ザ「鋼牙！あれは奇術だ、恐らくナイフはこっちに来る！」

ザルバの言う通り、ナイフは少し静止した後、鋼牙に向かって飛んで来る。

鋼牙「！」

カキカキ カキン

鋼牙は飛んで来るナイフを全て剣で弾いた。

咲「全て弾くとは…どうやら前面の攻撃に強いと見ました。なら…」

「速符「ルミネスリコシエ」

「側面の攻撃ならどうですか？」

咲夜は一本のナイフを壁に向けて投げる。

コン

ナイフは壁に刺さらずに跳ね返る。

コン コン コン コン

ナイフは壁のあちこちを跳ね、鋼牙にあたりそうになる。

コン

壁を跳ね返り、今度は鋼牙に真っ直ぐ向かって飛んで来る。

鋼牙「はあ！」

カキン！

鋼牙は後ろのナイフに気づき、剣で弾く。

鋼牙「今度はこっちの番だ！」

ズバッ

鋼牙は高くジャンプをし、剣を構える。

ブン

咲「甘いですよ。」

咲夜は軽く避けるが：

鋼牙「甘いのはそっちだ！」

フオフオフオフオン…

鋼牙は振り向いた瞬間、剣を投げていた。

咲「なっ！」

「時よ止まれ！」

咲夜はそう言うと、今度は剣がこっちに向かって来る。

鋼牙「！」

パッ

鋼牙は剣をキャッチする。

咲「私をここまで追い詰めるとは…」

鋼牙「どうした、本気で来い！」

咲「では…覚悟してください、死んでも知りませんから…」
「幻世「ザ・ワールド！」」

咲夜は大量のナイフを投げると…

ビシューーン

世界が止まり、咲夜はナイフを新たに大量に投げる。

ビシューーン

世界が動き出し、前後の無数のナイフが鋼牙を襲う。

鋼牙「・・・」

スパ

パーーン

鋼牙は剣で天を裂く。すると裂けた天から黄金の鎧が現れ：

ガキン

鎧は鋼牙の身体に貼り付き、それぞれが腕、脚、体、になり、そして…

ガシン

頭が被さり、鋼牙は黄金の鎧騎士になる。
飛んで来るナイフは鎧によって全て弾かれる。

咲「なっ…」

咲夜は驚いた。

突然鋼牙が鎧を身につけてナイフの全てを弾いた。しかもその神々しい姿に目を奪われる。

ガシ ガシ ガシ

鋼牙は鎧の姿で咲夜に近づく。

鋼牙「勝負あったな。」

鋼牙は黄金の剣を咲夜に向ける。

咲「…はい、私の負けです。」

ガシャーン！

鋼牙は黄金の鎧を解除した。

咲「では…お嬢様と会って頂けますか？」

鋼牙「ああ。」

ダンテ「良いぜ。」

咲「では付いて来てください。」

さて、いよいよこの館の主が登場だ。

続く
…

紅魔
次回！

第3話 魔館（後書き）

次回はあのお嬢様とご対面です。
ダンテもそろそろ：

ではまた次回。

第4話 紅魔（前書き）

今回は例のお嬢様に会います。

あ、ちなみに二人は弾幕を撃ちません。二人は弾幕を撃ちません。
重要なので：

ではどうぞ。

第4話 紅魔

よう、前回はお嬢様と会うとか言ってたが、正直驚いた。あれがお嬢様なのか？とな：

咲「では付いて来てください。」

咲夜は鋼牙とダンテを誘導する。

咲「ここです。」

ザ「ここか…」

かなり大きい扉が目の前に現れる。

コン　コン

咲「お嬢様、お客様をお連れしました。」

？「入れて頂戴。」

少女のように幼い声が聞こえると、咲夜は大きい扉の片方を開ける。

ガチャ！

あまり重そうでは無い。

？「ウッフ…待ってたわ。」

椅子に座っていて、そう言うのは青髪の少女。

ザ「待ってた？俺達が来るのを知っていたのか？」

？「ええ、そうよ、ザルバ。」

ザ「俺の名前も知っているとは…気味が悪くなってきた。」

？「咲夜、行って良いわよ。」

咲「はい、失礼しました。」

ガチャン！

？「自己紹介からするわ、私はレミリア・スカーレット。」

鋼牙「俺は冴島　鋼牙だ。」

ダンテ「俺はダンテ。」

レ「ここは紅魔館、私はこの紅魔館の主。あなた達を待っていたわ。」

鋼牙「待っていた？」

レ「あなた達が美鈴を倒すのも、咲夜と闘うのも全てわかっていたわ。」

鋼牙（運命を操る程度の能力…俺達の行動がわかるという事か…）

ダンテ「俺達は何をするのかもわかっているのか？」

レ「ええ、あなた達は私と闘う。そして、あなた達はこの私に負ける。」

鋼牙「じゃあその運命を打ち破ってやる。」

シーン

鋼牙は剣を抜く。

ダンテ「そうだな、負けるって言うなら、その負けの運命を勝ちに
してやろうぜ。」

チャキ

ダンテはエボニーとアイボリーをクルクルと回し、レミリアに向け、

構える。

ザ「吸血鬼…血を吸われないように気をつけろよ。」

ダンテ「吸血鬼か…そう言えば…」

ダンテは背中から紫色のエレキギターを取り出す。

ダンテ「こいつも吸血鬼なんだぜ。」

レ「吸血鬼？」

ダンテ「こいつはネヴァンで名前だな、昔闘った事がある奴なんだ。」

「こいつでここをコンサートに変えてやるよ。」

ジャーン！

ダンテはネヴァンをかき鳴らす。

鋼牙「行くぞ。」

ダンテ「Show time！」

鋼牙とダンテはレミリアに向かって走る。

レ「必殺「ハートブレイク！」

レミリアは紅い槍を両手に作り出し、鋼牙とダンテに投げる。

鋼牙「ふんっ！」

サッ

鋼牙は跳んで避けるが、ダンテは…

ダンテ「行くぜ！」

ジャーン！！！！

バーン！

ダンテがネヴァンをかき鳴らすと、鳴り響く音色が音波となり、紅い槍をかき消す。

ダンテ「そら！」

ダンテはレミリアの前まで膝で滑り、ネヴァンを弾く。
するとネヴァンの音色が雷のコウモリとなり、レミリアに向かって飛ぶ。

レ「はっ！」

ババン！

レミリアは弾幕を放ち、コウモリを消す。
と…

ダンテ「L e t s r o o k ! ! !」

チャララララッ！！！！

ダンテが高速でネヴァンを弾くと、雷が放たれ、たくさんのコウモリが飛び交う。

レ「何？」

レミリアは驚きながらも、コウモリと雷を避ける。

鋼牙「はあっ！」

鋼牙は剣を振り上げると、剣から真空の刃が放たれ、レミリアに向かって飛んで行く。

レ「それ！」

バン
バン
バン

レミリアは紅い大玉弾幕を放つ。

ブォン

真空の刃は大玉弾幕を一つ切り裂き、残りの大玉弾幕によって相殺。

レ「やるじゃない。」

「獄符「千本の針の山！」

レミリアは弾幕と共に紅いナイフを放つ。
が、ナイフの量が半端じゃなく多い。

鋼牙「くっ！」

鋼牙は自分に飛んで来るナイフを剣で弾く。

ダンテはベオウルフを着けた右腕を床に向かって力一杯殴り付ける。

ダンテ「STYLE：ソードマスター。」

「光爆「ヴォルケイノ！」

ダンテが殴った地面から光のエネルギー波が放たれ、光のエネルギーに触れたナイフは蒸発、弾幕も共に光に変わる。

レ「くっ…さすがね。」

「神術「吸血鬼幻想！」

レミリアは大玉弾幕を忙しなく放つ。
大玉弾幕の後ろから弾幕が現れ、飛ぶ。

鋼牙「ふんっ？」

スパーー

パァーーン！

鋼牙は剣で天を裂き、黄金の鎧を召還する。

ガキン

黄金の鎧は鋼牙に装着される。

レ「?」

黄金の鎧の顔は狼のように鋭い牙、耳、口、目は緑色。
例え鎧だとしても今にもその口を開き、その牙で狩られてしまう程
の迫力。

レ「あなた…何者？」

鋼牙「我が名は牙狼！ 黄金騎士！」

鋼牙こと牙狼はその黄金の姿を現す。

レ「黄金騎士…伝説は本当だったのね…」

レミリアはその神々しい姿に見惚れ、攻撃をやめる。

レ「光あるところに、漆黒の闇ありき。」

「古の時代より、人類は闇を恐れた。」

「しかし、漆黒を断ち切る騎士の剣によって、」

「人類は希望の光を得たのだ。」

「これは昔聞いたおとぎ話の一部。それがあなただったとは…」

レミリアただその姿に見惚れるばかり。

ダンテ「へえ、スゲえな鋼牙、なら俺も…」

ダンテはそう言うと、自分の悪魔の力を…

ダンテ「ウウウアアアアア!!!」

ブォーーン!!!!

解放する。

姿はまさに悪魔その物。姿は赤く、口からは鋭い歯も見え、背中には黒く大きな翼が生えている。

鋼牙「ダンテ、お前は…」

ザ「すまん、そう言えばダンテを見た時、こいつの種族を特定したら半人半魔だと言うのがわかった。言うのを忘れててな…」

ダンテ「そんな事今はどうでもいい、あいつを倒すのが今の俺達のやる事だ。」

鋼牙「ああ。」

鋼牙は頷くと…

鋼牙「必殺「烈火炎装！」

鋼牙は剣を構え、力を込めると…

ヴォーーン！！！！

緑色の炎が牙狼剣と黄金の鎧を包む。

ダンテ「雷奏「ディストーション！」」

ダンテもネヴァンをかき鳴らし、電撃を溜める。

ダンテ「ハアアアアアアア！！！！」

ジャーン！！！！

ダンテが最後に思いっ切りネヴァンを鳴らすと、大量のコウモリが
一帯となり、強力な電撃を帯びながらレミリアに向かって飛ぶ。

ビリリリリリ！！！！

レ「うあああああ？」

鋼牙「ふんっ！！！！」

ズバン

ズバン

鋼牙が牙狼剣を十字に斬る。すると、炎が十字の形になり、レミリアに飛んで行く。

レ「!!!!」

「きゃああああああ!!!!」

ズゴン？

レミリアはその一撃で吹っ飛び、壁に直撃。
レミリアは気絶する。

ガシャーーン！

鋼牙「やったな。」

ダンテ「そうだな。」

二人が武器をしまいながらそう言うとき……

ドガーーン！！！！

ザ「なんだ今のは？」

この音の正体は……

次回！

狂魔

続く
…

第4話 紅魔（後書き）

次回はお約束のあの娘です。

牙狼の必殺技に少し困っています。できれば何か良いのが無いか知
っているなら教えて頂きたいです。

ではまた次回。

第5話 狂魔（前書き）

ついにあの娘との対決。

鋼牙とダンテは果たして…

ではどうぞ。

第5話 狂魔

さてさて…前回の音を気になって調べに行ったら、あんな事になってたとは…

ザ「なんだ今のは？」

ガチャ

扉が開くと、そこから傷だらけの咲夜が現れた。

鋼牙「どうした？」

鋼牙は倒れそうになる咲夜を抱える。

咲「に…逃げて…ください…！」

？「日符「ロイヤルフレア！」

ボガーーン！！！！

？「もっと本気だしてよ。」

謎の赤い服の少女が扉から飛んで入って来た。

？「くっ…」

紫髪の少女も扉から入って来た。
二人共浮いている。

？「あれ？お兄さん達も遊ぼう♪」

ダンテ「遊ぶのか？」

？「うん、弾幕ごっこ…」

瞬間、少女の眼が怪しく光る。

ダンテ「弾幕ごっこか、おもしろい遊びも存在するんだな。」

ダンテも少女を鋭く睨む。

？「お兄さん達の名前は？」

ダンテ「俺はダンテだ。」

鋼牙「俺は冴島　鋼牙だ。」

？「あなた達は……レミィを倒したの？」

ダンテ「ああ、なかなか楽しめたぜ。」

？「レミィと闘って楽しいだなんて……」

鋼牙「何があった？」

？「これを見てわからない？」

ザ「まあ、なんとなくわかるが…」

？「指輪が喋った？」

ザ「俺はザルバ、そう言うお前は何者だ？」

？「私はパチュリー・ノーレッジ、突然だけどあの娘を止めて！」

ダンテ「構わないが、俺達だけで闘う。」

パチュ「あなた正気なの？あの娘は「簡単に言うと邪魔だと言う事だ。」え？」

鋼牙「わかったら行け！」

パチュ「…わかった。」

パチュリーは扉から出て行った。

ダンテ「キツイ事言うな。」

鋼牙「・・・」

？「あゝ、長話で退屈・・・」

ダンテ「大丈夫だ、こっから退屈なんてしないからよ。」

？「∴私はフランドール・スカーレット、フランで良いよ。お兄さん、あまり早く壊れないでね？」

フランはそんな事を言う。

ダンテ「鋼牙、行くぞ！」

鋼牙「ああ。」

ダダッ

鋼牙とダンテは素速く走り、フランに向かって剣を振る。

フ「遅いよ♪」

フランは横に避ける。

ダンテ「こんな単調な攻撃で倒せるとは思ってねえよ！」

ダンテはリベリオンを構え、突進刺突攻撃を行なう。

フ「うわっ！」

フランは飛んで避ける。

ザ「この世界の連中はみんな飛べるのか？」

鋼牙「さあな。」

ズバッ

鋼牙は高く跳び、フランに向かって剣を振る。

フ「よっと。」

フランは軽くかわす。

フ「そろそろ行くよ!」

「禁忌「クランベリートラップ!」

フランはスペルカードを発動。
何やら鋼牙とダンテの周囲に呪式が配置され、そこから弾幕が放たれる。

ダンテ「さてと、じゃあ…」

カチャ

ダンテは水平二連型ショットガンを構える。

ダンテ「行け！コヨーテ！」

バン！

ダンテの銃の一つ、コヨーテ・A
対悪魔用に改造された散弾銃。

フ「銃？」

フランは散らばる弾を見極め、避ける。

ダンテ「STYLE：ガンスリンガー。」
「ガンスティンガー！」

ダンテはフランに近づき、ショットガンを撃つ。

バン！

フ「うっ…」

フランは弾を幾つかくらったようだ。
フランが着地したその時…

鋼牙「はぁ！」

ズバン！

鋼牙は真空の刃を放つ。

フ「くっ！」

「禁忌「レーヴァテイン！」

フランは炎のオーラを帯びた剣を振る。
すると…

鋼牙「ふんっ！」

ガキン！！！！

鋼牙は剣一本で恐ろしく長い剣を止める。

ダンテ「おら！」

ガキン！

ダンテも剣を振り、炎の剣を止める。

ダンテ「イイイイイイアアアア！！！」

鋼牙「うううおおおおお！！！」

バキン！！！！

ダンテと鋼牙が力を込め、炎の剣を斬る。

フ「なっ？」

ダンテ「どうした？お嬢ちゃん、本気で来て良いんだぜ？」

フ「フフ…わかった。」

「禁忌「フォーオブアカインド！」

フランは四人に増える。

鋼牙「本物は…」

ダンテ「片っ端からやるだけだ！」

ダンテは四人に向かってネヴァンを構える。

ダンテ「STYLE：ソードマスター。」
「刃奏「フィードバック！」」

フオフオフオフオン…

ネヴァンが変形し、刃が現れ、ダンテはネヴァンを回転させる。

フ「それ！」

フランは飛び上がり、弾幕を放つ。

ダンテ「行くぜ！」
「クレイジーロール！」

ビリリリリ！！！！

ダンテは自分ごとネヴァンを激しく回転させ、終わりに思いつ切り
ネヴァンをかき鳴らす。

ジャ~~~~ン！！！！

かき鳴らした事により、強力な落雷と放電が起こる。

ビシャア~~~~ン！！！！

フ「うわっ！！」

フランの一人が放電により消える。

鋼牙「行くか…」

スパ—

パア—ーン！

鋼牙は剣で天を裂き、鎧を召還する。

ガキン

牙狼「はあああああああ！」
「必殺「烈火炎装！」

ヴォーーン！！！！

牙狼は緑の炎を剣と身に纏う。

牙狼「はあ！！！！」

ズバン！

ズバン！

牙狼は剣でバツ字を斬り、炎がバツ字の形となり、フランに飛んで行く。

フ「くっ！」

バシユ！

炎がフランの一人を切り裂く。

ダンテ「じゃあ、俺も！」

「ウウウアアアアア！！！」

ブォーーン！！！！

ダンテも魔人化をする。

ダンテ「舞踊」「ダンスマカブル！」

「Are you lady？」

スバッ

ダンテはフランに一瞬で近づき、剣による無数の連続攻撃を行う。

フ「？」

ズバン！

ザシュ！

ジャシーーン！！！

ダンテ「フオ〜〜！！！！」
「クレイジーダンス！」

ダンテはリベリオンを床に突き刺し、リベリオンを軸に回転しながら蹴る。

バゴツ！

フ「ぐふっ！」

ダンテはリベリオンを引き抜き…

ジャシーーン！！！

フランを斬る。

またフランの一人が消え、本物のフランだけが残った。

ダンテ「さあ、後が無いぜ。」

牙狼「本気で来い！」

フ「じゃあ、これで！！！」

「秘弾「そして誰もいなくなるか？」」

フランの姿が消え、追尾をする弾幕が突然出現する。

ザ「この弾幕、上手い事誘導しないとヤバイぞ！」

牙狼「誘導か。」

ダンテ「STYLE…トリックスター。」

「よし、行くぜ！」

牙狼とダンテは迫る弾幕を誘導する。

弾幕は消えるが、今度は辺りから弾幕が迫る。

牙狼「烈火激竜！」

牙狼は手から深紅の炎を出し、牙狼剣に纏わせる。
そして、剣を横に振り、超巨大な炎の竜を放つ。

牙狼「行け！！！」

牙狼の言葉と共に深紅の竜は緑炎の竜と化し、辺りの弾幕を一掃する。

フ「？」

竜の一掃により、フランが姿を現す。

ダンテ「ハアアアアア！」

ダンテは武器をネヴァンに換え、フランに向かって飛ぶ。

フ「はあっ！」

ダンテ「ハア？」

ビシャア！

ダンテは手から電撃を放つ。

フ「きゃあああああ!!!!」

フランは電撃をくらい、落下する。

ダンテ「そら!!」

ダンテは落ちるフランをかなりのスピードで近づき、抱える。

ダンテ「よっ。」

シューーン

ダンテは魔人の状態を解く。

鋼牙「ふう。」

ガシャーン！

鋼牙も鎧を解除する。

ダンテ「さて、どうする？」

レ「………！フラン！どうして？」

鋼牙「訳は知らないが、暴走していた。」

ザ「全く、姉妹揃ってまともじゃないな。」

レ「何故姉妹だと…？」

ザ「俺もここに来てから何かが目覚めたとしても言うのかな？そんな感じだ。」

レ「妹を助けてくれてありがとう。」

鋼牙「良いんだ。」

ダンテ「いつもの事だからな。」

レ「あなた達は泊まる宛はあるの？」

ダンテ「そう言えば…無いな…」

レ「良かったら、一晩どうぞ。」

鋼牙「良いのか？」

レ「フランを助けたお礼よ。」

鋼牙「すまない。」

レ「いいえ。あなた達のお話も聞きたいし。」

恐ろしいお嬢ちゃんも無事退治したな。
次回は平和になりそうだ。

次回！

談話

続く
⋮

第5話 狂魔（後書き）

皆様にお知らせです！

牙狼＞GARO＜ ｝MAKISENKI｝

金曜日の1・4・5 絶讃放送中です！

次回は会話だけだと思います。

ではまた次回。

第6話 談話（前書き）

今回は会話のみです。

何か鋼牙とダンテの昔話でも出そうですね。

ではどうぞ。

第6話 談話

前回のフランとか言うお嬢ちゃんを鎮めた後の事だ。
今日は特別、闘いの無い平和な日だった。

天の視点…

陽は沈み、鋼牙とダンテにとって幻想郷での初めての夜になった。

鋼牙「・・・」

鋼牙は用意された部屋のベッドに座り込む。

ダンテ「ふうゝ…」

ダンテも用意された部屋に仰向けに倒れる。

鋼牙ルーム…

鋼牙「・・・」

ザ「鋼牙、どうしたんだ？」

鋼牙「・・・」

ザ「おい鋼牙！」

鋼牙「！」

ザ「お前らしくないな、ボーっとしてるなんて…」

鋼牙「・・・」

ザ「もしかして、カオルの事か？」

鋼牙「……ああ……」

ザ「大丈夫だろ、カオルだってそこまで不用心では無い筈だ。」

鋼牙「……ああ……」

ザ「それに、零の奴がいるじゃないか。あまり気にする事も無いだろ。」

鋼牙「……そうだな……」

ダンテルーム：

ダンテ「全く、来て早々にああなるとはな…ま、暇だったから良いんだけどよ。」

ダンテは赤いジャケットからスペルカードを取り出した。

ダンテ「このスペルカードとか言う札は、必殺技の形なのはわかったんだけど…」

「何でいちいち唱える必要があるんだ？」

気になる内容はそっちだった…

ダンテ「まあいい、とりあえず、少し寝るか。」

その10分後…

鋼牙の部屋の扉がノックされた。

コンコン！

鋼牙「…！」

咲「失礼します。」

ガチャ

咲「お食事の準備ができました。」

鋼牙「そうか…今行く…」

鋼牙が部屋から出て来ると、ダンテの姿が目に入る。

ダンテ「ふぁゝ…良い昼寝だった。おっと、今は夜だから夜寝かな？」

咲「では、付いて来てください。」

ザ「何やらデジャブ現象が起こっているぞ…」

鋼牙とダンテは咲夜の後を付いて行く事に…

咲「ここです。」

ダンテ「またデカイ扉だな。」

ザ「パーティールームと言ったところだろ。」

鋼牙「入るぞ！」

ガチャ！

鋼牙はそう言うと、扉を開ける。

レ「ウッフ…待ってたわよ。」

ザ「またデジャブだ…」

フ「フランもいるよ♪」

パチュ「私もお邪魔させてもらっているわ。」

咲「ではごゆっくり…」

ガチャン！

鋼牙とダンテは空いている席に座る。

ダンテ「こんな豪華な食事…生まれて初めてだぜ…」

鋼牙「俺はいつも通りだが。」

ダンテ「……俺だけかよ…」

鋼牙とダンテは巨大なテーブルに並べられた食事を腹一杯食べた。

ダンテ「ふう、食ったぜ。」

レ「食事を終えたところで、聞きたい事があるのだけど…」

鋼牙「何だ？」

レ「あなたが外の世界でどんな事をしていたのか？」

ダンテ「何だ、そんな事か…」

鋼牙「俺は魔戒騎士としてホラーを狩っていた。」

ダンテ「俺は悪魔狩人（デビルハンター）として悪魔を狩っていた。」

パチュ「魔戒騎士に悪魔狩人、この幻想郷には全く縁の無いものね。」

レ「でも私はお母様から昔、おとぎ話で聞いた事があるわ。」

パチュ「まあ、探してみた結果、一冊だけあったわ。内容は…」

「光あるところに、漆黒の闇ありき。」

「古の時代より、人間は闇を恐れた。」

「しかし、漆黒を断ち切る騎士の剣により、」

「人類は希望の光を得たのだ。」

レ「これは私も聞いた事がある話だわ。」

パチュ「題名は無いわ、これは外の世界から落ちてきた物だから。」

ダンテ「伝説ね。」

ザ「ダンテ、そう言えばお前の事を聞いて無い。そろそろ話しても良いんじゃないか？」

ダンテ「……俺の親父は、伝説の魔剣士、スパーダなんだ。」

レ「なっ……あの……伝説の……魔剣士、スパーダの……息子……」

パチュ「……スパーダに関しては一切と言って良いほど無いわ。」

鋼牙「スパーダ……聞いた事が無い、教えてくれないか？」

レ「魔界では知らない物がいない程の魔剣士。魔界の王、ムンドウスが魔界の王となれたのも、彼の力があってこそ。だけど彼は突如正義の心に目覚め、人間の為にその命を燃やした。」

ダンテ「親父が死に、母さんが悪魔に殺された後、俺は誓った。」

「悪魔をこの手で消してやる。」

「その言葉通りに俺はムンドウスを倒した。……あまり話したくない、もう戻る。」

鋼牙「俺も戻るとする。」

二人は席を立ち、扉を開け、部屋に戻る。
と、その時…

？「二人とも、どうしました？昔話で元気が無くなっちゃいましたか？」

鋼牙「!？」

ダンテ「!？」

？「紹介が遅れました、これからあなた達のサポートを度々させて頂きます、作者です。」

少年は普通の服装に普通の髪型。
特に飾りがないような少年。

ザ「なんだ作者か、どうしたんだ？」

作者「いや、所謂案内役ですよ。幻想郷で上手く生きて行く為の。」

鋼牙「…ザルバ、何か知っているのか？」

ダンテ「……まあいいや、続けてくれ。」

作者「とりあえず、今日は僕の紹介だけです。特に何もありません。
ですが…」

鋼牙「何だ？」

作者「僕の力はなんでも創り出したり消したり、何か困った事があったなら呼んで下さい。」

「邪魔な奴は僕がこの世から消してあげますから…」

「では…」

少年はかなりシリアスな目つきをした後、笑顔に戻り、瞬間消えた。

作者が登場だ。

少し厄介になるかもな…

次回！

博麗

続く
⋮

第6話 談話（後書き）

作者「どうも、出ちゃいました。」

「次は紹介なので……」

「何の紹介かって？それはスペルカードですよ。」

ではまた次回。

第7話 博麗 + スペルカード紹介（前書き）

作者「さて、無理矢理＋を付けたわけですが、もうこの際に話と紹介を一緒にやっちゃえ…と思ったからこそになりました。」

「悩んでいるのは二人の能力です。」

「うーん…どうしよっかな…」

「まあとりあえずどうぞ。」

第7話 博麗 + スペルカード紹介

よう。

前回、作者がいきなり登場、とりあえず話は翌日からだ…

作者登場一件から、翌朝…

鋼牙「…………ん…」

鋼牙は目を覚めました。

バサッ

鋼牙「・・・」

ガチャ…

鋼牙はベッドから立ち上がり、ドアを開ける。

鋼牙「?…咲夜か…」

咲「おはようございます。」

ダンテ「……? ふうあ…」

ダンテもその頃目を覚ました。

ダンテ「良い目覚めだ。」

そう言いながら頬を叩き、銀髪を掻きながらドアに向かい、開ける。

ガチャ

鋼牙「？ダンテか。」

咲「おはようございます。」

ダンテ「ああ、うん、おはよ……」

ダンテが挨拶をした直後だった：

シュン

作者「二人共、おはようございます！」

鋼牙「…ああ。」

ダンテ「……？」

咲「何者ですか？」

作者「咲夜さんもおはようございます！」

咲「なぜ私の名を？」

作者「知っていて悪いですか？」

「僕は作者です。それ以上でもそれ以下でもありませんよ？」

ザ「まず以上や以下より、お前の事を説明したらどうだ？」

作者「そうですね。僕は二人の案内役の作者と申します。」

咲「名前が…作者？」

作者「良い名前が思いつかなかったものでこれにしたんですよ…」

「ちなみに、僕的能力は
(創造する程度の能力) です。意味わかります？」

咲「さあ…」

作者「あらゆる物や人物、人外、世界を創り出す能力です。もちろん逆もあります。」

鋼牙「逆？」

作者「創り出す以外に 消す と言う事もできます。」

ダンテ「消す？　どう言う意味だ？」

作者「あらゆる物、人物、人外、世界を消せると言う事です。」

鋼牙「何？」

作者「なぐに、鋼牙さんやダンテさんは例外ですから、安心してください。」

咲「作者と言ったわね、あなたは一体…」

作者「あなた達が一步間違えれば、この世からおさらば…もしくは幻想郷が消え去ります。」

咲「……ッ！！！」

作者「冗談ですよ。」

作者はニコツと笑いながらそう言った。

作者「とりあえず、ご飯行きましょう！」

鋼牙「……そうだな。」

ダンテ「咲夜、もうブレックファーストはできているのか？」

咲「…はい、こちらです。」

咲夜は鋼牙とダンテを食事場へと案内した。

作者「じゃあ、食べ終わったら行きましょう。これから連れて行きたい場所があるので。」

作者はそう言った瞬間、姿を消した。

鋼牙とダンテは食事を済ませ、紅魔館を出る事に…

鋼牙「ありがとう、世話になったな。」

レ「気に入ったわ、何かあったらいつでも来なさい。歓迎してあげる。」

ダンテ「そいつはありがたい。」

フ「ダンテさん、また遊びに来てね♪」

ダンテ「ああ。」

鋼牙「じゃあな。」

ザ「またな。」

鋼牙とダンテは紅魔館から出て、門を開けようとした時：

シュン

作者「どうも、あの～、そろそろ目的を果たしたいのですが…」

鋼牙「何処へ行くんだ？」

作者「付いて来てくれれば結構です。…それにしても待ちましたよ
～…いつになったら出て来るかな～？ って…」

ダンテ「おい、お寝坊嬢ちゃん！門を開けてくれ！」

・
・
・

作者「僕が開けますよ。」

ガシヤ…

作者「…相変わらず寝てます。」

紅「ZZZ…」

ダンテ「よく寝られるな、しかも立って…」

鋼牙「・・・」

ザ「作者、そろそろ行こう。」

作者「ではご案内します。」

歩いて1分後…

作者「ちなみにお二人の能力なんですが…」

ザ「能力？いきなりどうした？」

作者「能力は、僕のような不思議な力の事です。」

ザ「それで能力がどうした？」

作者「まず、鋼牙さんの能力なんですが…

（想いを力に変える程度の能力）

なんてどうでしょう？」

鋼牙「想いを力に…」

作者「あなたの想ってる人を思い出してみてください。」

鋼牙は眼を閉じる。
思い浮ぶのは…

鋼牙「カオル…」

作者「あなたの思いが力となり、今後の助けになるでしょう。気持ち次第では全てを闇に葬ってしまいます。気をつけてお使いください。」

鋼牙「わかった。」

作者「ダンテさんは…
（遺された想いを目覚めさせる程度の能力）
でどうですか？」

ダンテ「遺された想い…」

作者「あなた闘って来た強敵の想いをあなたの力にします。ピンチの時に発揮されます。あなたが闘った強敵は、今もあなたの中で生き続けている。と言う事です。」

ダンテ「……そうか…良いな、それ。」

作者「後、スペルカードも出していただけますか？」

鋼牙「ああ。」

ダンテ「何に使うんだ？」

作者「皆さん、ご覧ください！」

冴島 鋼牙 スペルカード集

必殺「烈火炎装」

「烈火激竜」

「鳳牙烈空」

「轟天召還」

超激剣「牙狼斬馬剣」

ダンテ スペルカード集

リベリオン
舞踊「ダンスマカブル」

「クレイジーダンス」

ケルベロス

氷牙「クリスタル」

「ミリオンカラット」

氷壁「アイスエイジ」

アグニ&ルドラ

炎風「クロウラー」

竜巻「ツイスター」

「テムペスト」

ネヴァン

刃奏「フィードバック」

「クレイジーロール」

雷奏「ディストーション」

ベオウルフ

光弾「ゾディアック」

光爆「ヴォルケイノ」

一撃「リアルインパクト」(ベオウルフver)

「トルネイド」

ギルガメス

撃波「ショック」

神龍「デイベインドラゴン」

一撃「リアルインパクト」(ギルガメスver)

ルシフェル

終剣「クライマックス」

導剣「ボンデージ」

閻魔刀

次元斬「スラッシュディメンジョン」

作者「これが鋼牙さんとダンテさんのスペルカードです。かなり多いですね…。ちなみにダンテさんはソードマスターだけスペルカード化しました。結構多いので…」

ダンテ「誰に話しているんだ？」

作者「独り言ですよ。それより、到着ですよ。」

鋼牙とダンテの目の前に鳥居が現れる。

ダンテ「何だこりゃ？」

鋼牙「鳥居があると言う事は…」

作者「ここは神社ですよ。」

「その名も博麗神社。」

作者はテクテクと歩いて行く。

ザ「作者がここに連れてくるくらいだ。何かあるんだろ…」

鋼牙「そうだな。」

ダンテ「神社か…日本は不思議な場所だね。」

鋼牙とダンテも作者の後を付いて行く。

作者「さて、お金…100円か…まいっか。」

ヒョイ

チャリン

？「むむむっ!？」

ズドドドドド…ッ…!!

作者「来た来た。」

？「お賽銭入れたのはあなた!？」

作者「会わせたい人がいるんです。」

？「？」

作者の後ろに鋼牙とダンテが現れる。

？「後ろの人達の事？」

作者「はい。」

鋼牙「…？」

ダンテ「…？」

作者「紹介します、右の無表情の人が冴島 鋼牙さんです。

左の銀髪の人がダンテさんです。

僕の名前は作者です。」

？「…初めまして、鋼牙さん、ダンテさん。私はこの博麗神社の巫女…

博麗 霊夢（はくれい れいむ）よ。」

博麗神社の巫女…か…
また何かありそうだ…

次回！

巫女

続く
⋮

第7話 博麗 + スペルカード紹介（後書き）

作者「どうも作者です。」

「博麗神社に来ましたが…」

「二人はどうか？想像してみてください。」

「あっ…あまり高い想像はしないように…」

「また次回にお会いしましょう。」

第8話 巫女（前書き）

作者「おはこんばんちは〜！作者です。」

「前回、博麗神社に来たのですが…」

「あっ、一つ言って置きますが、帰りませんよ？」

「……後はありません。」

「ではどうぞ。」

第8話 巫女

前回、博麗 霊夢とか言う嬢ちゃんの登場だ。
この嬢ちゃん、金の事になると色々ヤバいな…

霊「…初めまして、鋼牙さん、ダンテさん。私はこの博麗神社の巫女…

博麗 霊夢よ。」

鋼牙「で、話しとは何だ？」

作者「そうでした。霊夢さん、二人は今のところ帰れますか？」

霊「…今は無理ね。」

ダンテ「おい、変だぞ。今のところって何だよ？」

作者「条件次第と言うか…時の流れ次第と言うか…… そんな感じ
です。」

霊「説明不足ね…作者が言いたいのは…」

作者「あゝゝ！待って言わないで！ここは言わないで置いて！」

ザ「気になるから教えろ。」

霊「邪魔。」

バゴツ！

作者「ひでぶツ！！」

作者は霊夢に蹴り飛ばされた。

霊「簡単に言うと、この物語が終わるまで帰れないと言う事。」

鋼牙「・・・」

ダンテ「・・・」

作者「あゝ・・・」

・・・

ダンテ「なら終わるまで付き合ってやるよ。」

作者「へっ?」

鋼牙「ああ、それならそうと早く言えば良い。」

作者「お、何か…受け入れてくれた…」

「あ、ちなみに鋼牙さんとはある財閥の御曹司なんですよ。」

¥¥¥

霊夢の眼が一瞬にして¥マークに変わった。

霊「その情報に、い、偽りは…無いでしょうね。」

作者「でも、幻想郷にいたので御曹司だと言っても意味無いんですけど。」

霊「何それ…」

霊夢の眼が一瞬にして死んだ。

？「わゝ！危ねえ！」

作者「へっ？？」

ボガッ！！！！

作者「あべしッ！！！」

作者に突っ込んで来た白黒の少女の箒が顔面に直撃した。

ドバン！

作者「……ヒドイ……」

？「悪い、大丈夫か？」

作者「大丈夫なものかつ……!!」

作者の頬に円い痕が残った。

作者「それよりも紹介を……お願いします……」

? 「えっ? ああ。私は霧雨^{きりなめ} 魔理沙^{まりさ}って言うんだ。よろしくな!」

鋼牙「冴島 鋼牙だ。」

ダンテ「俺はダンテだ。」

魔「また変わった外来人が来たな。」

ザ「変わってる？お前達の服装も変わっているが…」

魔「…おい…今誰が喋った？」

ザ「俺だ、白黒の嬢ちゃん。」

魔「指輪が…喋った！！！」

魔理沙は目をキラキラさせながらザルバに近づく。

魔「凄ええ！何て名前だ？」

ザ「俺の名はザルバ。魔導輪だ。」

魔「魔導輪っ！！凄～～～！！！」

ザ「おい作者、こいつをどうにかしてくれ。」

作者「…はぁ…仕方ないですね。魔理沙さん、どいてください。さもないと…」

「あなたの存在を消します。」

作者はその笑顔とは裏腹に背筋が凍る一言を言い放つ。

魔「へっ?」

作者「こう言う事ですよ。」

魔「?…うわああああ?わ、私の手が…ッ!」

魔理沙の手が半分消えている。
消えた部分はまるでテレビの砂嵐のようなモヤモヤとした何かが消えた部分に付いている。

作者「さあ、離れてください…」

魔「わ…わかったよ…」

魔理沙はそっとザルバから離れる。

作者「ご理解ありがとうございます。」

魔「はっ！手が…」

魔理沙の手の半分が戻った。

ザ「……そこまでしろとは言って無いぞ。」

作者「他に方法が思い付かなかったので。」

魔「・・・」

霊「・・・」

作者「……とりあえず……行きましょう！」

鋼牙「？」

ダンテ「お、おい。」

作者は急ぐように博麗神社から離れた。

作者「次は…冥界なんてどうですか？」

鋼牙「冥界？何だそれは？」

作者「行けばわかります。」

ダンテ「しばらく暇潰しに困らないなこりや。」

冥界だとき。

そろそろ休みたいところだ…

次回！

冥界

続く…

第8話 巫女（後書き）

作者「どうもすみません…」

「魔理沙さんの手を消してしまい、どうもすみませんでした!」

「魔理沙さんファンの方に深くお詫び申し上げます…」

「さあて! 次回は見てわかる通りです。」

「ではまた次回。」

第9話 冥界（前書き）

作者「おはこんばんちは〜！作者です！」

「冥界行くわけですが…」

「どうしましょ…冥界でどうしましょ…」

「ではどうぞ。」

第9話 冥界

冥界へ行くと言い出した作者。
冥界へ行ってどうするんだ？

ズサ　ズサ　ズサ

作者「鋼牙さん、ダンテさん。ここだけの話、僕はあなた達をここに落とした人の所へ案内したいのですが、あの人の都合を考えるとまだそうはいきません。」

「ですが、必ず、あの人の所へ…
そしてここに落とした理由を聞かせてあげます。ですから、しばらくはこの生活に慣れて頂きたいのです。」

鋼牙「・・・」

ダンテ「なるほど…」

鋼牙とダンテはその事を理解した。

何故ここに落としたのか：

そしてそれを行った人物は何者なのかを知るために：

と、突然：

ガサッ

ガサガサッ

妖怪「ガオウー！」

鋼牙「何だ？」

作者「来ましたね、雑魚中の雑魚、獣妖怪です。」

「出て来てください！バージルさん！」

作者がそう言うのと、作者の目の前にダンテの兄であるバージルが姿を現した。

ダンテ「？何だ？これは幻覚か？」

作者「幻覚ではありません。これは僕が創り出したバージルさんです。」

バージ「久しぶりだな、ダンテ。」

「こんな雑魚相手に呼び出したのか…」

妖怪「ガルルルル…」

バージ「ふんっ…」

バージルは手に持つ閻魔刀を静かに構える。
そして…

妖怪「バウッ！！！」

バージ「ふんっ！」

カチャ…

バージルが刀に触れた瞬間、世界がスローになる。

バージルは走り出し、一気に刀を振り抜き、獣妖怪を次々と切り捨てて。
て。

そのあまりの速さに世界がスローに感じると言うものだ。

シャン！

バージルは刀の一閃を見せた後、静かに刀を鞘にしまう。

カチン

スパ―…

鞘にしまった直後、獣妖怪達はバラバラになる。血も噴き出ない程呆気なく死んだ。

ダンテ「バージル！」

ダンテはバージルに駆け寄るが…

シーン

バージ「まだまだお前は弱いな。」

バージルはダンテの首に刀の先を向ける。

ダンテ「ああ。」

バージ「しかし、あの時以来か……」

「俺はあの時、ただ力だけを求めていた。だがお前は父スパイダのように誇り高き魂とその正義の信念があった。俺はお前との戦いに負け、あの滝から落ちた。」

「落ちた場所で、現れたのは魔界の王、ムンドウス。だが戦いに敗れた俺は奴の配下となった。」

「奴の命令はお前を倒す事。俺は奴の命令に従った。そしてお前と闘っている途中、お前が首に掛けているアミュレットを見た時、僅かだが意識が戻り、俺は抵抗した。」

「だが闇の力は予想以上に強かった。俺の意思とは逆にお前と戦い続けた。しかし、お前は強かった。回数を重ねる程に実力が上がった。そして最後に俺とお前との決着を着ける時…」

「俺はお前に顔を見せた。せめてこの姿で戦いたいとな。そして…お前は俺に勝ち、俺は敗れ。最後に俺はお前に俺のアミュレットを託した。それが兄としてやってやれる最後の事。そして俺は消滅した。」

「だが、今こうしてお前の前に居る。」

ダンテ「……兄さん…」

バージ「涙を流すな。お前は俺や親父を超えた最強の魔剣士なんだから。」

ダンテ「…そうだな…悪魔は涙を流さない。

Devils never cry…」

バージ「この先、お前に想像を絶する敵が現れる。どこまでも強くなって、誰にも負けない魔剣士になれ。」

ダンテ「ああ…わかってる…」

バージ「そろそろお別れだ。作者、頼む。」

作者「はい。」

作者が返事をする、と、バージは光と共に消えた。

鋼牙「ダンテ…」

ダンテ「ふっ…行こうぜ。」

作者「では行きましょう…って、もう着いていました。」

作者はうっかりと言う具合に頭を掻き、指を指す。
その方向には半透明の超長い階段があった。

作者「行きましょう。慣れるにはいろいろな人と触れ合う事からってね。」

作者は階段を昇り始めた。

鋼牙とダンテも後に続き付いて行く。

10分後…

作者「はあ…はあ…やっと…着いた…もうダメ…」

鋼牙「少し休憩をしよう。」

ザ「しかし、行くと行った作者がこの始末か…おい！大丈夫か？」

作者「何とか！」

ダンテ「もうダメじゃないのかよ。」

作者「休憩するなら少し待ってください。」

ダンテ「どこへ行くんだ？」

作者「ちよつとです…」

作者はそう言うと、走り出した。
作者が向かったのは…

作者「白玉楼…居るかな？」

作者は屋敷の前に来た。

人を捜しているが、しかし、普通の人から見たら明らかに不審者だ。

その時…

シーン…

作者「？」

ズバッ

作者「ぬわあああああああああ！！！！」

ピチューンPP

作者消滅。

そして鋼牙とダンテは…

鋼牙「今の声は…作者！」

ザ「まずい！あいつの生命反応が無い！悲鳴はあの屋敷から聞こえたぞ！」

ダンテ「急ぐぜ！」

作者が何者かに…
一体誰なのか…

次回！

魂魄

続く
⋮

第9話 冥界（後書き）

ザ「作者が消えちまったから代わりに言うぞ。」

「作者を斬った犯人は誰なのか…」

「ちなみに文章を少しずつ変えて行くそうぞ。」

「じゃあな。」

第10話 魂魄（前書き）

ザ「さて、今回は作者が消えちゃった理由だ。」

「しかし、何で作者は消えちゃったんだ？全くわけがわからん。」

「説明は終わりだ。始めるぞ。」

第10話 魂魄

よう。

前回、作者の悲鳴が聞こえた所からだ。

鋼牙とダンテは作者の悲鳴が聞こえた屋敷の方へ向かった。
そこで鋼牙とダンテが見たものは…

鋼牙「!!!!!!」

ダンテ「!!!!!!」

それは、銀髪の少女が刀を持ったまま立って居た。
刀にはうっすらと血らしき液体が滴り落ちる。
恐らく彼女が作者の悲鳴の原因だろう。

鋼牙「貴様、作者に何をした？」

？「作者？誰の事ですか？…もしかして私が先ほど斬った青年でし
ようか？」

鋼牙「何？」

ダンテ「多分そうだな。だけど嬢ちゃん、親に教わら無かったか？
いきなり人を斬ってはいけないってな…」

？「いいえ、私は代々この剣術を受け継いで来たので、そんな事は
一切。それに、怪しかったので…」

少女は全く表情を変えない。

人を斬ったのに…

しかもそれが当たり前のように…

ダンテ「最初に言っておく。あいつも人間だ。斬ったら罪なんだぜ

？それを知らないって言うなら、俺が教えてやらないとな…」

ダンテはそっと閻魔刀を取り出す。

？「あなたも同じ剣士でしたか。でしたら、少しお手合わせ願えませんか？」

少女が持っている刀をダンテに向けて構える。
刀は綺麗な煌めきを見せる。

ダンテ「良いぜ。ただし、俺は見様見真似の剣術だから、あまり相手になるかわからないぜ？」

？「試してみれば良いだけです。」

私は魂魄^{ここんぱく} 妖夢^{ようむ}。半人半霊の剣士です。あなたの名も宜しいですか？」

ダンテ「俺はダンテ、半人半魔の魔剣士だ。」

少女とダンテは互いの名前を言い、直ぐさま戦闘体制へと入る。
そして：

カチャ：

ダンテ「STYLE：ダークスレイヤー。」

「行くぜ！」

まず動いたのはダンテ。
閻魔刀を納刀したまま構え、前へ跳ぶ。
その瞬間妖夢も動いた。

妖「剣伎「桜花閃々！」

妖夢は刀を納刀し、構え、ダンテと同じように斬りかかる。
このままだと相打ち。だが…

シュン…

妖夢の姿が突然消え、気がつくと後ろに現れた。
妖夢の通ったと思われる場所には桜がヒラヒラと落ちている。
すると突然…

バシユッ！

ダンテ「…ッ！！！」

突然ダンテの身体に斬撃が走る。
見ると身体には無数の切り傷が…

妖「残念ですね、私は誰であろうと容赦しないのですよ。」

ダンテ「そうか、なら遠慮無くやれんな。」

妖「何？」

妖夢は後ろに視線を移す。
そこには斬られたにも関わらず、平気で、しかも笑顔で立っている
ダンテの姿があった。

妖「さっき斬った筈？」

ダンテ「確かに斬られたぜ。けど言ったら、俺は半人半魔の魔剣士だって…」

ダンテは閻魔刀を構え、瞬間拔刀。

その瞬間、妖夢以外の障害物を全て斬り飛ばす。

スパーン！

妖夢はダンテが刀を振り抜いた瞬間から動けなかった。
妖夢の額からは汗が滴る。

ダンテ「心配すんな、お前だけは斬って無いからよ。」

妖「人符「現世斬！」

ダンテ「おいおい、まだやんのかよ。」

妖夢は刀は納め、抜刀。

神速の如き速さで妖夢はダンテに向かって斬る。

スバーン!!!!

ダンテ「うおっ!!!」

「だが効かねえな。」

妖「くっ!」

普通の人間なら一刀両断され、上半身と下半身が離れ、スプラッタ
ーな映像が流れるが。

ダンテは人間であり悪魔でもある為、その身が斬られても無問題な
のだ。

血は流れるが…

ダンテ「どうした嬢ちゃん？ そんなんじゃ俺は倒せないぜ？」

だがダンテも人間。いくら悪魔の力で身体が斬れないとしても、ダメージはしっかりと受けている。

妖「なら…」

シン

妖夢はもう一本の刀を抜き、二刀流の構えを摂る。

妖「覚悟っ！」

妖夢はダンテに向かって走り、二刀を振るう。

ダンテ「危ねえ。」

ダンテは妖夢の振るった二刀を跳んで軽々避ける。
と、妖夢はダンテが避けた瞬間、横に振った二刀を構え直し、ダンテに向かって振り上げる。

ダンテ「そう来たか…」

ダンテは妖夢が振り上げる刀の一振りを避ける。
が、もう一振りは避けきれず、そのままくろう。

ダンテ「くっ…」

妖「いくらあなたでも飛ぶ事はできないようですね。」

ダンテ「そりゃな…」

妖「しかもあなたの様子を見ると、私に斬られたダメージはちゃんと残っているようで。」

ダンテ「ふふ…バレたか…」

妖「では、そろそろ終わりにしますか…」

「人鬼「未来永劫斬！」

妖夢は二刀を納め、その中の長い一本の刀を構え、抜刀。
神速の如き一閃はダンテを斬るだけで無く、そのまま空中へと舞い

上げる。

そして妖夢はダンテに近づき、神速で何度も斬りつける。

ズババババババババババババツ!!!

ダンテはその神速の攻撃を受けて傷だらけになる。

ダンテ「…ッ！」

妖「終わりです！」

妖夢は空高く飛び、刀をダンテに振り下ろそうとした。
その時…

？「…テ…」

ダンテ「・・・」

？「…ンテ…」

ダンテ「…？」

？「ダンテ！」

ダンテ「！？」

世界は突然静止し、ダンテの耳には何者かの声が…

ダンテ「だ、誰だ…」

？「俺の声も忘れたか？」

ダンテ「この声は？…バージル！」

バージ「ふんっ…」

ダンテ「何故だ？作者は居ないんだぞ！」

バージ「さあな、俺も何故来る事が出来たのかわからん…だがな、今の状況はハッキリする。」

「お前が負けるとはな…
大方調子に乗って斬られ過ぎたんだろう。」

ダンテ「正解だ…」

バージ「…たく、俺が来なかったらどうするつもりだった？」

ダンテ「もちろん反撃だ。身を削ってでも避けてやる。」

バージ「いつも余裕尺尺なお前がここまで追い詰められるとはな…」

ダンテ「んな事はいい。何故居るんだ？」

バージ「想いが目覚めた。と言えばわかるな。」

ダンテ「想い…能力か！」

バージ「お前に遺した俺の想いが目覚めたんだ。さて、少し身体を借りるぞ！」

ダンテ「はっ？おい？ちょ待て！」

シューーン！

バージルは有言わさずダンテの中へと入って行った。

ダンテ「うおっ！わっ！くっ…」

「はぁ…さて、やるか。」

姿こそダンテだが、声はバージルそのものだ。

ダンテにバージルが完璧に入った瞬間、静止した世界が動き出す。

だが、ダンテ…いや、バージルの真上には刀を振り下ろす妖夢がいる。

ダンテ「ふんっ…」

バージルが鼻で笑うと、閻魔刀を真上の妖夢に向けて抜刀。

シャキンッ！

抜刀と同時に納刀。
それはバージルの得意技。

ダンテ「斬波「次元斬！」

すると、妖夢が黒い球体らしきものに包まれ、球体から斬撃が発生する。

ズヴァン！

妖「く…ッ!!!!」

妖夢は突然現れた球体に驚き、さらに斬撃が現れ斬られるなどの事で少し混乱している。

だが混乱している暇は無かった。

ダンテ「ふんっ!!!!」

ズヴァン　ズヴァン　ズヴァン!!!!

妖夢の周りにまたあの球体が現れた。

妖夢はかわそうとするも、三撃全てくらう。

妖「うく…ッ！！！」

妖夢は身体に走る斬撃の痛みに耐え攻撃をする。

妖「断迷剣「迷津慈航斬！」

妖夢は刀にオーラを纏わせ、刀のリーチを伸ばし、バージルに斬りかかる。
が…

シュン！

バージルはその姿を消した。
妖夢にはそう見えただろう。
だが、バージルは動いただけ、しかも超高速で…

ダンテ「こっちだ！」

ズヴァン　ズヴァン！！

妖「うあああッ！！！」

妖夢は再びバージルの次元斬をくらう。
次元斬のダメージが大きい為、妖夢は地面に降りた。

スタッ

ダンテ「どうした？ 所詮はその程度か…」

妖「さっきとは比べ物に無らない程強い…
本気を出していなかったと言いき事か？」

ダンテ「早く来い！ それとも俺が行って斬るぞ。」

妖「くっ！ くらえ！」

妖夢は刀を振り、刀先から弾幕を放つ。

ダンテ「無駄だ。」

バージルは閻魔刀を手で回す。
すると飛んで来た弾幕が閻魔刀によって弾かれるように消える。

妖「なっ？」

ダンテ「小細工など通用しない。」

「もういい、終わらせるか。」

「瞬斬「疾走居合！」

バージルは閻魔刀を納め、勢い良く走り出す。

妖「負けるか！」

「待宵反射衛星斬！！」

妖夢は桜の弾幕を展開。

バージルの左右に、そして通りを作るように弾幕が張られる。
そして妖夢は刀を腰辺りに構え、力を溜める。

そして…

ダンテ「!!!!」

妖「!!!!」

ジャキイイイン!!!!

一閃!

バージルと妖夢は互いの技をぶつけた。

互いが真後ろに居る状態。

暫しの静かな時…

そして…

カラン…

妖「あああ…」

勝ったのはダンテの中に入ったバージルであった。
すると…

ダンテ「……ん？あれ？おい、一体何をした？」

バージ「お前の仕事を片付けてやっただけだ。」

世界は再び静止し、バージルはダンテの中から出て来た。

ダンテ「仕事？あつ、嬢ちゃんが倒れてる。そう言えば俺、あの嬢ちゃんと戦ってたんだな。」

バージ「全く、世話の焼ける弟だ…」

ダンテ「誰も世話しろとは言っていないぜ？」

バージ「まあいい、今日の役目は終えた。俺はもう還る。」

ダンテ「そうか…またな。」

バージ「ああ。」

バージルが消えた瞬間、世界が動き出した。

ダンテ「ふう…」

鋼牙「ダンテ、大丈夫か？」

ダンテ「ふつ、なぐに、体した事ねえよ。」

鋼牙「そうか。」

ザ「しかし、作者は一体どうしたんだ？」

その頃…

作者「・・・」

「(´Д｀)ど(´Д｀)?」

「そして何これ？」

コンティニューしますか？

はい

いいえ

作者「・・・」

「コンティニュー画面！！！？？？」

「・・・」

「そりゃ・・・」

コンティニューしますか？

はい

↑

いいえ

作者「だろ…」

「ポチッとな。」

シューン…

ドサッ

作者「痛ッ！」

鋼牙・ダンテ「!？」

ザ「作者！一体何処に行ってたんだ！」

作者「いや…説明が出来ない場所です…」

？「あら、お客様かしら？」

作者復活！

そして現れた謎の女…

次回！

亡霊

続く…

第10話 魂魄（後書き）

作者「はいどうも。斬殺された作者です。」

「ダンテさんの能力が発動したのですが…」

「実は鋼牙さんとダンテさんの能力って似てるんですね。」

「後、バージルさんが入った後も ダンテ」と、ありますが、姿がダンテさんなんでそのままにしました。」

「ではまた次回。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9990x/>

魔戒騎士と魔剣士が幻想入り

2011年11月26日22時45分発行